論　文　ニダバ (*Nidaba*) 34(2005), 165-174

在広島朝鮮人一世の言語使用の移り変わり

― ある一世の事例から ―

金　奉　仙

1．はじめに

朝鮮人が広島に来たという記録は、「日韓併合（1910 年）」以後のものしかない。広島市編（1983）によれば、1910 年の段階で広島に暮らしていた朝鮮人は 24 人であったが、土地調査事業が完了した 1918 年には 910 人、1932 年には一万人を越え、終戦を迎える 1945 年には 84,886 人に達していた。しかし原爆や帰国により 1950 年には 14,938 人[1] となり、それほどの変化もないまま、2000 年においても 10,815 人[2] が生活している。広島の西区には今もなお多くの在広島朝鮮人一世（以下一世とする）が生活を営み、母国の伝統を守りながら母国の文化と日本の文化を併せ持った新しい文化を創りあげている。その代表的なものの一つとして、言語をあげることができる。

一世が話している言語は、しばしば「チャンポンマル」、「ポンセン語[3]」といわれている日本語と朝鮮語を混合した言語である。しかし、これまでこの言語の研究は、現在の言語状況におかれており、一世の言語を明らかにしたとはいえないものであった。つまり、どのようにして現在のような言語に辿り着いたのかが明らかにされていないのである。

そこで本稿では、一世の言語混用を明らかにすることを目的とし、ある一世を対象に、そのひとのライフヒストリーを通して、言葉の使用がどのように移り変わっていったのかを明らかにする。

2．先行研究

在日朝鮮人に関する社会言語学的な研究は、アンケートを中心にした意識調査と会話分析を中心にした実態調査に分けられて研究されてきた。

生越（1983）は、在日朝鮮人の二言語生活の実態を知るため、京阪神に生活する成人や子供を中心に、日常生活での朝鮮語の使用を話し相手と状況などの社会言語学的な項目のもとにアンケート調査を実施した。任栄哲（1992、1993）は、在日・在米韓国人の言語生活の実態を比較対照する方法を採用し、二言語使用の意識構造やその現れを、彼らを取り巻く様々な環境と関連付けアンケート調査を行った。

そして、談話資料をデータとした研究にはコード選択に焦点をあて、その言語体系と言

語運用に着目した塚本勲・金静子（1993）、金静子（1994）、黄鎮杰（1994）、文春琴（1997）、金美善（2001a、2001b）、金美善・生越直樹（2002）、金奉仙（2003）がある。これらの研究は、地域的に京阪神を中心にした研究である。

しかし、広島を研究対象に言語混用について研究したものはないが、一世の意識調査として広島市編（1983）、談話資料の紹介として安錦珠（2002）がある。

今までの研究は、一世の自然談話をデータとし、言語運用に注目して分析を行われていた。しかし、これらの研究は現在の言語運用についてしか述べてない。つまり、どのようにして一世が今のような言葉を使用することになったのかは記述されていない。

3．調査方法

調査は、広島市西区でデイサービスを行っている「かりん」で2004年4月から行い続けている。一世は水曜日と金曜日に多く来るということで、その日に「かりん」に行き調査を行っている。調査の主な内容は、人生の中で忘れられないできことを中心にその当時の言語生活を語ってもらうことにある。そして、その内容は一世の許可を得たうえで、IC レコーダーに録音している。IC レコーダーへの録音は、デイサービスの始まりから終わりまで一世のそばにおいておくか、筆者が直接手にしたまま話を聞きながら行っている。録音したものを文字化するときは、日本語は日本語で朝鮮語は朝鮮語で表記している。

インフォーマントの金さん（78、女、仮名）は、2002 年から「かりん」を利用するようになった。日本語と朝鮮語の両方において、書いたり、読んだり、話したり、聞いたりする能力がある。

4．金さんのライフヒストリー

金さんは、慶尚南道陜川で 6 人兄弟の末っ子として生まれた。上に兄が一人、姉が 4 人いる。

10 歳ぐらいのとき、村長が自分の畑を提供して建てた簡易学校で、2 年ぐらい学校に通ったことがある。このとき、週一回日本人の先生が来て、日本語を教えてもらった。学校に通っている途中で父が亡くなり 12 歳で兄がいる日本に来た。そのため、日本でも学校には行きたがったが、行くことができなかった。それでも、自分で本を買ったりして勉強し、朝鮮語と日本語で手紙を書いたり、読んだりできる。

日本に来るときは、母、姉、そして、兄の嫁さんと一緒に来た。最初に定着したのは、宮島の地御前であった。結婚するまでの約 6 年をそこで過ごした。18 歳のときに結婚し、中町（現在の西区）に移った。結婚後まもなくして、原爆に遭い、夫は被爆による酷い火傷の痕がある。終戦後、金さんの家族は全員韓国に帰ったが、金さんは結婚していたため帰ることができなかった。

終戦後最初に行ったのが、タバコの商売である。28 歳ぐらいからは、大阪の鶴橋で韓国

の服の生地を仕入れ広島で売る商売をした。その当時、広島では、生地を仕入れるところがなく、大阪まで行くしかなかった。大阪の鶴橋は、今もそうであるが、昔は今よりもっと品種も多く、店も多かったという。大阪から仕入れた生地を裁断し服を作るのは、ほかの人に任せた。結婚式などがあるときは、よく売れた。これを、4〜5年間行った。

34歳のときにはじめて韓国に行き、すでに何十回も行き来している。最初パスポートを取るときには2年かかった。東京オリンピックの時には、韓国にいる兄と姉を呼び、オリンピックを見に行ったこともある。それ以来、韓国にいる親戚をしばしば招待している。

30代半ばには都町（現在の西区都町）で大韓民国居留民団（以下、民団）の婦人会を作った。初めは5〜6人を集めての活動であったが、民団の研修会があるときは必ず参加し積極的であった。53歳の時に被爆の後遺症で入院する。

第12回アジア大会のときには韓国の選手を応援するため、韓国チームの試合には必ず行って応援をした。

74歳の時に心臓が悪くなり手術をした。そのせいで体の具合が悪くなり、「かりん」に来ることになった。

5．言語使用の移り変わり

ここでは、金さんのライフヒストリーにしたがい言語使用の移り変わりに中心をおいて述べる。金さんは日本に来る前、簡易学校で約2年間教育を受けたことがある。そのとき、週一回、一日ずっと日本人の先生の指導で日本語を勉強した。金さんによれば、自分は兄と姉が学校に行くから一緒について行ったという。そして、算数と演劇には積極的に参加したが、それ以外にはあまり興味がなく、家に帰りたいときに家に帰っても、外で遊んでいたときでも先生は何も言わなかった。このことから考えると、教育は受けたといってもそれほど日本語の能力があるとはいえない。

この点も踏まえ、5.1.来日してから結婚するまで、5.2.結婚、5.3.原爆が落ちてから20代後半まで、5.4.家族、5.5.「かりん」という項目ごとに分析を行う。

5．1．来日してから結婚するまで

金さんが来日したのは1938年である。お父さんがなくなり、兄がいる日本に行くことになった。兄は、宮島の地御前というところで山を崩す仕事をしていた。金さんは末っ子ということもあって、結婚するまで何もしなかった。たまに外出したときに乗る電車がおもしろかったという。電車賃を一回払って、上手に乗り換えれば、一日中ずっと乗ることができた。

そして、仕事をする人の中には家族を連れてくる人もいて、その子供と一緒に遊んだりした。以下の会話文は地御前でどのように生活していたのか、特に言葉の使用についてのものである[4)]。

会話文１：地御前にいるときには、日本語が分からなくても生活ができた

金：それじゃけ、조선사람（朝鮮人）、＊＊＊くるく（暗い）なったから、そこで、はいきゅうとってきて、そこで、もう、あんまり、ふじゅうせんからね、（不自由）そのなかみんなあるから、そこで、くらし、

私：あのう、そしたら、あのう、金さんは、えっと、にほんじんと、あんまり、しゃべるじかんが、なかったんですか、

金：うん、ない、ない、

私：ない、

金：ぜんぜん、조선（朝鮮）、일본사람（日本の人）と、うち、じごうぜんおるとき、일본사람とあんまり、せっしょくせんかった、ちょうないかいちょういう、おじいさんが、ひとり、くるだけでね、みんな、조선사람ばっかり、

私：あ、조선사람ばっかり、

金：うん、それじゃけ、うちら、けっこんするときでも、そのなかで、うちひとりだけじゃたけね、

私：あ、それしたら、もう、にほんご、わからなくでも、せいかつができた？

金：できたよね、

私：できたんですか、

地御前では、仕事を求めて集まってきた朝鮮人だけで工事現場の近くに集落を作り生活をした。日本人と接触する機会はほとんどなく、そのため、日本語が分からなくても朝鮮語だけで生活ができた。したがって、金さんは結婚する18歳までは、それほど日本語が話せなかったと思われる。

５．２．結婚

金さんは18歳のとき結婚し、中町に移る。結婚後は夫と二人で住んでいたが、原爆が落ちてからは親と一緒に住むようになった。結婚した当時の夫の家族は、舅、姑、夫の妹が二人、夫の弟が二人いた。夫は三歳のとき母と一緒に日本に来たので、日本語しかわからない。そして、夫の妹と弟も日本で生まれたので日本語しかわからない。舅は、日本語の読み書きもできるが、姑はできない。舅と姑は自分の子供と話すときは日本語を使った。

しかし、舅と姑は、金さんには、時が経つにつれ日本語と朝鮮語を混ぜるようになったが、当時は朝鮮語で話した。それは金さんが朝鮮人だという理由からである。以下の会話文２は、そのことを語ったものである。

会話文２：舅、姑との会話は朝鮮語

私：そのとき、あのう、金さんが、姑さんと会話するとき、どうやって？

金：それじゃけ、한국사람（韓国の人）じゃけ、한국사람을 야야（韓国の人を、ヤヤ） ゆーてから

おもに、うちには한국말（韓国語）ばっかりする、おとうさんも、

私：おとうさんも、

金：うん、씨아바시（舅）

私：はいはい、

金さんは、夫の妹や弟とはあまり接したことがない。それは、彼らが原爆で亡くなり、接したのが約一年という短いこともあるが、彼らは金さんとは別に暮らしていたうえに昼間には学校に行き、しかも日本語しか話すことができなかったからである。それでも、その当時（1944 年）金さんは夫の弟と話すときは日本語だけで話していたが、夫の弟のようには上手に話せなかった。そのことを次のように語っている。

会話文３：金さんが夫の弟のように日本語がまだ上手に使えない

私：その씨동생（夫の弟）とは、にほんごでやったんですか、ちょうせんごでやったんですか？

金：あれ、わからんじゃけ、ひとつもあれが、それじゃけ、うちら、あのう、あんまり、じぶんみたいに、ぺらぺら、しゃべらかったもんね、

私：はい、あのう、ちょうせんごは、わからなかったんですか、

金：むこう、あいてはわからん、うち、にほんごがぺらぺらわからん、わかるのは、まー、あれじゃたけね、

私：Um

金：それじゃけ、あれが、あのう、ちょっと、なまいきなかったんよ、それで、うち、きらいじゃたんよ、あんまりすきじゃ、すきにはなれんかったね、

私：その씨동생は、もう、日本で生まれたんですね、

金：それはそうよ、こちでうまれて、ここで、あれして、さんにんみんながっこうじゃたけ、

家族間における言語の使用状況をまとめてみると、図１のようになる。

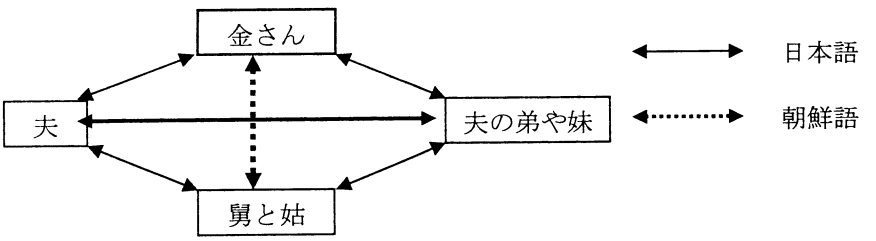

図 1. 家族間の言語使用

５．３．原爆が落ちてから 20 代後半まで

金さんは、原爆後もしばらくは舅と姑と一緒に住んでいたが、20 代半ばから商売をする

ため、すぐ近くで別に家を構える。それ以来、多くの人と接するようになり、その人と話をする機会も増えたと思われる。このときから、言葉を混ぜながら話し始めたようである。会話文４は、原爆投下後、知り合いと話をするとき、言葉を混ぜるようになったことを述べたものである。

会話文４：知り合いとの会話で言葉を混ぜる

金：げんばくおちたときはわすられん、

私：そうですね、そうゆう、ユ、ともだちとはなしあったりするときは、やっぱり、どうゆうことばでしゃべってましたか、

金：にほんごまぜるよ、

私：あ、ちょうせんごのなか、にほんごがまぜるんですか、

金：それじゃけ、어떤사람이고（どんな人でも）わからんひとには、まぜられんよね、

私：あ、やっぱり、あのう、おんなじ、ちょうせんのひとでも、

金：うん、

私：おんなじちょうせんのひと、

金：わからんひとがおるじゃない、

私：うん、おんなじちょうせんのひとでも、わからないひとが、

金：わからん、それ、ちょうせんごわからんひと、しっとるひともおるけね、わからんひとにまぜてもしょうがないよ、

私：うん、

金：わかるひとには、まぜるよ、

私：しらないひとにはどうするんですか、

金：しらないひと、ほとんど、にほんごじゃね、

私：うん、おんなじ、あのう、在日の、あのう、우리나라사람이라도

金：そうそうそう

筆者と一世との間でよく話題になったひとつが、原爆の話である。原爆が落ちたときのことは昨日のことのように覚えている。会話文 4 はその原爆が落ちた後、どのような言葉で話していたのかを語ってくれた場面である。金さんはひとつの規則をすでに持ち、相手が朝鮮語がわかるかどうかで、言葉を混ぜるかどうかを決めていたようである。これは、別の見方をすれば、その当時すでに朝鮮人の中には日本語ができた人もいたということが言えるのではないだろうか。しかし、「金：わからん、それ、ちょうせんごわからんひと、しっとるひともおるけね、わからんひとにまぜてもしょうがないよ」から、朝鮮語がわからない人もいたということが考えられる。

その一方で、初対面のような知らない人には、ほとんど日本語で会話をしていた。それ

は、相手の顔だけを見て日本人か、朝鮮人か区別がつかないこともあるが、そうした人々には日本語を使って話すことがもっとも無難であったからと思われる。

5．4．家族

金さんは、家族との話すときほとんど日本語である。家族の中で朝鮮語が少しでもわかるのは、長男、次男、そして次男の嫁である。それ以外の人（夫、長女、次女、孫）は朝鮮語がわからない。特に次男の嫁は、1988 年に韓国から結婚のために来た。長男と次男が朝鮮語がわかるようになったのは最近のことであり、それは金さんとの会話には影響を与えていない。そこで、ここでは金さんにある程度影響を与えたと思われる次男の嫁との会話を述べる。

会話文 5：次男の嫁が来て、言葉が再び混ざるようになる

私：と、二番目のよめさんは、かんこくからきたんじゃないですか

金：そうそう

私：その二番目の嫁さんはハングルで、あのう、韓国語でしゃべてるんですか、にほんごでしゃべてるんですか

金：日本語で

私：日本語で

金：あえもう、にほんごばっかりよ

私：Um、それでも、最初は韓国語でやったんですよね

金：そうそう、それで、うちがまぜるようになったんよ

私：あ～～～

会話文 5 の「金：そうそう、それで、うちがまぜるようになったんよ」は、金さんが次男の嫁が来たときから、日本語と朝鮮語を混ぜるようになったと誤解するかもしれない。しかし、これは次のように見るべきであろう。つまり、5.3 で述べたように原爆後すでに日本語と朝鮮語を混ぜて話していたが、5.5 で述べるように次男の嫁が来るまではあまり日本語と朝鮮語を混ぜては話していなかった。しかし、次男の嫁が来てから、再び混ぜて話すようになった。次男の妻に歩み寄るため、朝鮮語と日本語を混ぜて話すようになったと考えられる。

5．5．「かりん」

筆者がはじめて「かりん」に行ったのは 2004 年 4 月 21 日である。金さんともこの日に初めて出会った。毎週水曜日に「かりん」に来る一世は、金さん以外にも 10 人おり、帰化した 2 人を含めると 13 人ぐらいになる。そして、日本人が 10 人ぐらいいる。金さんは、

日本人と職員には日本語を、帰化した一世にはなるべく日本語で話す。そして、帰化していない一世には日本語と朝鮮語を自由に混ぜて互いに話す。

同じ一世であっても、誰もが言葉を混ぜて話すわけではない。会話文 6 は、それをよく表している。帰化している高（84、女、仮名）さんとは、金さんも努めて日本語だけで話そうとする。

会話文 6：帰化している高さんとは日本語で話す

私：あ、高さんは、確実に、まぜないんですよね、

金：まぜないじゃろう、

私：うん、

金：あのう、まぜん、あれ、うちまぜるとおこるんよ、

私：笑い、なぜでしょう、

金：また、うん？

私：なぜでしょう、

金：まぜるとおこるよ、金さん、

私：なぜ、

金：うち、それじゃけ、むかしから、なかったんじゃが、あのひとが、あんたどうしてかんこくことまぜるんかゆーて、

私：うん、

金：まー、むかしは、あーじゃなかったのに、このひとおかしいね、

私：うん、そのとき、だから、高さんと話したときは、えーと、日本語だけでも十分に、にほんごだけではなしたんですか、

金：うん、はなすよ、あれおこるけ、

私：うん、

金：まぜるない、

私：なぜ、おこるですかね、

金：かんこく、일본행동이（日本行動が） したいんよ、あえなひとはね、

「金：うち、それじゃけ、むかしから、なかったんじゃが、あのひとが、あんたどうしてかんこくことまぜるんかゆーて」から、金さんが以前は言葉をあまり混ぜて話していなかったことがわかる。

6．まとめ

一世の言語混用について、金さんの個人史にしたがって述べてきた。それをまとめてみると以下のようになる。

金さんは12歳に日本に来て、宮島の地御前で朝鮮人だけが集まっている集落で6年ぐらいを過ごした。このとき、日本人とは接触したことはほとんどなく、朝鮮語だけでも十分に生活ができた。そして、18歳のとき結婚して中町に移るが、金さんを取り巻く人々が地御前とは大きく異なってくる。日本語しかわからない夫、日本語と朝鮮語がわかる舅と姑、そして日本語しか分からない夫の妹や弟。日本人との接触も多くなる。さらに、20代半ばからは商売を始める。このような状況から、結婚する前は使用言語が朝鮮語だけであったが、結婚してからは日本語と朝鮮語を使用するようになったと考えられる。そして結婚してからは自分と似たような背景を持つ一世との出会いも増えたと思われる。日本語と朝鮮語を混ぜて話す環境が整ったと思われる。

しかし、時間が経つにつれ、日本語と朝鮮語を混ぜて話す相手がいなくなり、日本語だけで会話をする相手が増える。そこへ、韓国から嫁に来た次男の嫁との歩み寄りが再び日本語と朝鮮語を混ぜて話すきっかけを与える。その上、「かりん」での生活によってもっと混ぜるようになった。

注

1）1950年の国勢調査による

2）2000年の国勢調査による

3）この名称は田中克彦（1999）による

4）文字化する際、朝鮮語はそのまま表記しその後ろに（　）で日本語の訳を施した。そして、聞き取りが困難な箇所は「＊」で示した。

参考文献

安錦珠（2002）「広島の在日一世の聞き取りから」『部落解放研究』9、pp116-129

広島市編（1983）『広島新史　都市文化編』

黄鎮杰（1994）「在日韓国人の言語行動―コード切り替えに見られた言語体系と言語運用―」『日本学報』13、pp45-63

川村湊（1998）『海を渡った日本語』青土社

金美善（2001a）『在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究―大阪市生野周辺をフィールドとして―』大阪大学大学院文学研究科博士論文

金美善（2001b）「在日コリアン混用コードついて―大阪市生野区周辺における言語接触の観点から―」『青丘学術論集』19、pp275-300

金美善・生越直樹（2002）『在日コリアン一世の自然談話文字化資料』文部科学省特定領域研究 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究

金賛汀（1986）『異邦人は君ヶ代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史―』岩波書店
金静子（2002）『재일 한국인 1세의 한국어・일본어 혼용실태에 대한 연구』태학사
金奉仙（2003）『在阪済州道出身者一世の言語に関する社会言語学的研究』広島大学大学院国際協力研究科修士論文
文春琴（1997）「在日韓国・朝鮮人一世の言語運用の特徴―バイリンガリズムに見られる言語的特徴を中心に―」『日本語教育論文集―小出詞子先生退職記念』凡人社　pp623-638
任栄哲（1992）「二言語併用の社会言語学的研究―在日・在米韓国人の実態調査の結果から―」『日本語学』12、pp102-116
任栄哲（1993）『在日・在米及び韓国人の言語生活の実態』くろしお出版
生越直樹（1983）「在日朝鮮人の言語生活」『言語生活』376、pp26-34
田中克彦（1999）『クレオール語と日本語』岩波書店
塚本勲・金静子（1993）「在日韓国・朝鮮人の言語――一世・二世・三世を通して―」『槿域』２、pp84-100